

マンスリー・サンズ・トーク (68)

2014.7.1

木村 謙

江戸川橋に行ってみた

地下鉄有楽町線に江戸川橋駅があり、都心なのになぜ江戸川というのか、前から疑問に思っていた。江戸川ならば千葉との県境を流れているはず。

目白の台地の先に椿山荘があり、文京区関口という地名になっている。その下に江戸川橋があった。



江戸時代、この川を江戸川といていたが、現在では神田川なのだ。それならば判る。川沿いが公園になっていて、水清く、鯉が泳いでおり、岩の上には亀もいた。桜の季節には、兩岸は見事だろう。



神田川の左上に椿山荘フォーシーズンズホテル

公園を進むと、関口芭蕉庵があった。松尾芭蕉は、俳人になる前は伊賀藤堂藩に雇われ、神田上水の改修工事の差配をしていたと説明がある。神田上水は、神田から日本橋方面に水を供給する水路で、ご公儀も保守には注意を払っていたはずだ。当時、芭蕉の居た住居が芭蕉庵として残っている。彼は脱サラし

て俳人になったんだろうか。

早稲田の一角に漱石公園があった

椿山荘の南縁に神田川が流れ、その南は早稲田、昔は田んぼだった。そのほうへ歩を進めると、夏目漱石終焉の地という公園があり、漱石の像があった。



新宿区早稲田南町の漱石公園

2017年が漱石生誕150年で、新宿区がここに記念館を建てる予定。隣接して都営住宅があり、それを取り壊して記念館になる。今、道草庵というあずまやがあって、小説本などが展示されていた。



石塔があり、猫塚だという。漱石没後、家人が犬や猫などを埋葬したのだそうだ。「我輩は猫である」や「坊ちゃん」は、私でも肩が凝らないで気軽に読める小説である。また、この住宅は、ある医者を持ち物で、漱石は家賃で住んでいたらしい。その頃、漱石は朝日新聞から給与を月200円貰っていて、新聞社の社長と同額だったとのこと。

なお、漱石は49才、芭蕉は50才で逝去され、現代から見ると若くしてと思うが、その限られた歳月のなかで濃密に凝縮された人生だったのだ。